

『アテネのタイモン』における絵の贈り物とタイモンの両義性

## はじめに

金とは信用であり、金そのものに価値はなく金が可能にするものに価値がある。これは度々言われる事であり、確かに金は紙であり、単なる金属なのだから納得のいく説明である。しかし多くの人々が金によって喜び、また同時に金によって悲しみを経験し、金が人生で大きな役割を果たしているのは紛れもない事実である。ウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)の『アテネのタイモン』(*Timon of Athens*, 1623)<sup>1</sup>は金によって人生を狂わせた貴族の物語である。

作品を解釈するにあたり、二重性を取り上げた批評家は多い。寛大に振る舞いながらも貧しくなったタイモン(Timon)が友人に借金できない事に対して怒り悲しむ、そして復讐心をつのらせる様子を説明した Amanda Bailey は“ The divide between revenge and justice was never absolute, and Timon elaborates a system of debt inflected by violence ”(380)と復讐と正義の非分割性を述べているし、タイモンの性格を説明した Clifford Davidson は、“ In Timon, goodness and prodigality are inseparably bound together in one character. Shakespeare seems very much aware that Timon’s openness is at once a great virtue and a great fault ”(187)と主人公の性格の両面性を説明している。また Jonathan Baldo は不作法な哲学者アペマンタス(Apemantus)と人間嫌いになったタイモンの類似性と違いを説明しつつ、“ In *Timon*, the close working relationship between the generalizing and particularizing functions of Shakespeare’s doubles falls apart ”(580)と一般性と個別性の両方の特徴を作品中に見出している。このように作品にあらわれる二重性の特徴を説明した批評家たちの意見を踏まえたなら、作品で見られる二重性の描写に注目してみるの、見当違いではない。

褒美を期待して追従する画家からプレゼントをもらったタイモンは以下のような感想を述べる。

Timon                      Painting is welcome.  
The painting is almost the natural man;  
For since dishonour traffics with man’s nature,  
He is but outside; these pencilled figures are  
Even such as they give out. I like your work,

And you shall find I like it. Wait attendance  
Till you hear further from me. (1. 160-66)

絵のプレゼントへの感謝を述べるタイモンである。この絵に対してのタイモンの考えに、作品解釈で重要な意味が隠されていると筆者は考える。生きている人間は不正直さによって姿を隠してしまうが、絵の中の人間は見えている通りであると説明するタイモンであるが、変化しない絵は嘘が描かれたら、タイモンの言葉を借りるならば、見えている通りのままであり、本質を隠すものとなるという逆説が成り立つ。タイモンの考える絵に対してのプラスの考えとは反対に、不正直さが変化せず真実を隠すことになる、というマイナスの考えを絵に持たせる事も可能である。変化しない絵は両義性を纏ったプレゼントと言える。

本稿で説明するのは、この絵の両義性とタイモンの関係性であり、作品のテーマが絵によってどう表されるかを明らかにする事である。本稿は2つの節でタイモンを説明し、そして結論で上記の論題に答えを出す。第1節ではタイモンの友人に対する態度を説明し、第2節ではタイモンの金に対する態度を説明する。先に説明した絵の特徴がタイモンとどう関わり、作品のテーマがどう表されているのだろうか。

## 1. タイモンの友人への変わらない考え方

『アテネのタイモン』の主人公タイモンにふりかかる災いとは経済的破綻であり信じていた友人からの裏切りによる自身の精神的破滅である。ここではタイモンの友人に対する態度を破産前と破産後で比較して、どのような変化が見られるか検討してみたい。Robert B. Pierce はタイモンの友人に対する態度について“ In a dramatic environment in which no other social bonds seem to operate, he believes in a voluntary social group bound by philia or amicitia, the classical ideal friendship ”(81)とし、タイモンの友愛ともいえるべき理想的考え方を示している。タイモンのこの態度はもちろんPierce が“ a fiction generated by the corrosive fascination of wealth ”(82)と表現している通り偽物であるが、彼の財力に基づく間違った友人の在り方以外にも、タイモンの友人に対するある態度が見られるのではないかと考えられる。破産を知らされる前のタイモンは、友人から御用があれば喜んでその印を見せます、という言葉に対して

以下のような返事をする。

Timon O, no doubt, my good friends, but the gods  
themselves have provided that I shall have much help  
from you. How had you been my friends else? Why have  
you that charitable title from thousands, did no you  
chiefly belong to my heart? I have told more of you to  
myself than you can with modesty speak in your own  
behalf; and thus far I confirm you. ' O you gods, ' think I,  
' what need we have any friends if we should ne'er have  
need of 'em? They were the most needless creatures  
living, should we ne'er have use for 'em, and would most  
resemble sweet instruments hung up in cases, that keeps  
their sounds to themselves. ' [...] (2. 85-96)

友人の助けを必要としないなら友人を持つ必要はない、と語るタイモンであり、さらに友人に用がないのなら、友人は無用の長物となるはずであるとまで言うタイモンである。自分の役に立たないのなら、友人は必要ないという態度は友愛と程遠い、道具としてしか友人を見ていない証拠となる発言である<sup>2</sup>。しかし、この台詞の前半では自分の心に大切な存在としての友人という言葉を使っている。心に大切な存在としての友人、そして道具として必要な存在としての友人とは、明らかな矛盾が見られる。心と物の存在の両方を友人に見ているタイモンのこの発言は、彼の友人に対する浅はかな考えを表すものであり、その結果正反対の矛盾する考え方を示している。

財力によって作られた偽の友人以外にもタイモンの性格と思考によって作られた間違った友人の定義がこの台詞から明らかになる。破産する前からタイモンは間違った友人への態度を示している。タイモンが友人を楽器として喩えている事を考えるならば、演奏しなければ音が鳴らない物、つまり自発的な動きがない物と考えられ、それゆえそもそも友人としての善意の自発的手助けは期待できるものではない、という暗示を自らの友人の喩えによって表現してしまっている。素晴らしい音を奏でる楽器は調子よく甘い言葉で近づく友人たちに似ているし、この意味でも友人に対しての理想的

考えとは違った説明を行っているタイモンである。友人に対してのタイモンの間違っ  
た態度が明らかになったのではないだろうか。道具としての友人は正しい考え方では  
ない。

Robert S. Miola は偽の友人である貴族をもてなすタイモンの宴会の場面について、  
“ Timon’s banquet is not merely a dramatized image of the familiar Athenian wealness  
for feasting. It is a strikingly appropriate and resonant symbol of Athenian  
immorality ”(25)と説明しており、作品を議論する上での重要な要素であると筆者は考  
える。友人たちをもてなすタイモンであるが、そこで特徴的なのは歓迎の音楽であり、  
キューピッドやアマゾンに扮した仮面の婦人たちがそれぞれリュートを手にして演奏  
し踊るというもてなし方である。そして友人たちもテーブルから立ちあがり、アマゾ  
ンを一人ずつ選び、男女が対になって一同踊るというト書きの説明がある。ここでも  
オーボエの音楽が演奏される。こうした踊りのもてなしをアペマンタスは“ a sweep of  
vanity ”(2. 128)と皮肉を交えて述べるが、この音楽という特徴がタイモンの行方を暗  
示しているのではないか。音楽とは必ず終わるものであり、曲の華やかさは一時的な  
ものなのである。皮肉屋のアペマンタスに対してタイモンは“Farewell, and come with  
better music ”(2. 247-8)と別れを告げるが、ここでも音楽という言葉が使われている。  
音楽の一時性、散財の栄華の一時性を自らも認めてしまっている。音楽とは正反対の  
苦言ともいうべきアペマンタスの“ Thou wilt not hear me now, thou shalt not then ”(2.  
249-50)という聞くという単語を使った忠告が実は真実をついている。音楽、演奏は必  
ず終わるものであり、タイモンの栄華も必ず終わる<sup>3</sup>。

しかしタイモンには変わらない友人への態度、終わる事のない友人についての考え  
方が見られる。自分の財産が底をついたと知ったタイモンは友人たちに借金を申し込  
む。その一人ヴェンティディアス(Ventidius)への借金を申し込む口実を、執事に語る  
タイモンの台詞をここで引用してみる。

Timon

When he was poor,  
Imprisoned, and in scarcity of friends,  
I cleared him with five talents. Greet him from me.  
Bid him suppose some good necessity

Touches his friend, which craves to be remembered  
With those five talents. That had, give't these fellows  
To whom 'tis instant due. Ne'er speak or think  
That Timon's fortunes 'mong his friends can sink. (4. 218-225)

友人が貧しかった時に助けたのは、タイモンの善意かもしれないが、その善意を金を返してもらえという執事への命令で無にしてしまっているタイモンである。金によって友人を必要とするタイモンは、財産が底をついている事を知る前の前半のタイモンと同じである。この台詞でも友人があるならば、タイモンの財産は没落する事はない、とはっきり言っているように友人すなわち金という構図が見られ、道具としての友人という考え方が表されている。この節の前半で説明した友人を便利な道具として考えているタイモンの態度には、変化が見られない。後に人間と世を借金できない事によって呪うタイモンも、直接の原因は友人から借金出来ないという、便利であるはずの道具がうまく機能しないからというものであり、自身に破滅の原因を考える内省は欠如している。自身に必要だからゆえに友人の意味があるという考え方に、没落前も没落後にも変化は見られない。タイモンは友人に対して友愛ともいべき考え方を示してはいるが、その実は単なる便利な道具だから必要であり、不必要なら友人の意味はない、という誤った考え方である。没落前も没落後も友人に対してのタイモンの考え方に変化がないのが分かったのではないだろうか。状況が変わっても友人への考えに変化がないタイモンである。

## 2. タイモンと金の関係

この物語の主要な要素は金であり、金によって人生を狂わせていくタイモンの姿を描いた作品である。タイモンは破産を知る前には金に糸目をつけずに客をもてなす。“ More welcome are ye to my fortunes / Than my fortunes to me ” (2. 19-20)という言葉は彼の気前の良さを表す言葉であると同時に、金が可能にする事へのタイモンの重視の言葉である。礼儀に対して、それは誠意のない歓迎、見せるのさえ恥ずかしいほどわずかしかない善意を飾るために考案されたものである、それゆえ自分は盛大に客をもてなし、客に礼儀は不要である、という考え方の裏には自身の財産への絶対の自信

と金が可能にする礼儀の不必要という歪んだ考え方が見えてくる。単に客をもてなすための遠慮による礼儀はいらない、という言葉は金への信頼が前面に出ている発言と考えられるだろう。タイモンの金の重視の考えが明らかである。

それでは、タイモンを外から見た場合はどうなのだろう。タイモンの持つ金によって彼はどう映っているのだろうか。真実をつき、タイモンの虚飾を暴くアペマンタスに対して友人たちの反応を引用してみる。

First Lord

He's opposite to humanity. Come, shall we in,  
And taste Lord Timon's bounty? He outgoes  
The very heart of kindness.

Second Lord

He pours it out. Plutus the god of gold  
Is but his steward; no meed but he repays  
Sevenfold above itself; no gift to him  
But breeds the giver a return exceeding  
All use of quittance.

First Lord                    The noblest mind he carries  
That ever governed man.

Second Lord

Long may he live in fortunes! Shall we in?

First Lord I'll keep you company. (1. 276-86)

タイモンが考える金の力による自身の安楽な境遇と自信がある状態と同じように、外側から見るタイモンの姿も、これら友人たちの言葉でも分かるように、気高い心を持った人物である、という高い評価である。功労があれば7倍にして報いる様子、贈り物をすれば贈り主にさらに多くの返礼をするタイモンは、友人たちにとって黄金の神プルートスよりも重要な人物として映っている<sup>4</sup>。タイモンの持つ金は、自身の評価も確固たるものになっている、という役割を担っているし、そして友人たちからいつまでも長生きしてほしいという優しい言葉を引き出している。タイモンは自身由来のみなら

ず、外側からの評価も金によって、確固たる立場を得ている。金はタイモンにとって重要であり、自身の立場を決定している必要不可欠なものとなっている。

ただし、功勞の7倍もの報いや贈り物以上の返礼、黄金の神プルータス以上の評価というタイモンを説明する言葉はいささか度が過ぎる。通常、功勞の7倍もの褒美や贈り物以上の返礼には、もらって逆に遠慮してしまうという反応があって当然だし、もちろん神以上の評価はありえない。ここに金が可能にしているまやかしを読み込む事が可能である。宴会場に向かうアペマンタスが遅れて苦々しい顔つきで登場するという説明があるが、これが実情を知っている者の態度であるのは言うまでもない。

気前よく金を振る舞うタイモンであるが、反面彼は金の力を信じているある意味金への執着心がある人物である。David M. Bergeronはこの作品の特徴を“ Structurally, then, the play has moved from gold to lack of gold to gold again ”(368)と述べ、円環的性質を挙げているが、似たような事がタイモンにも当てはめられるのではないだろうか。金を持っている時のタイモンも、金を失った後のタイモンも結局変化しない、という予想が立てられる。不当な扱いを受けたアルシバイアデーズ(Alcibiades)がアテネに対して挙兵する事になり、彼に出会ったタイモンは偶然見つけた金をアルシバイアデーズに与え、戦費の一部にすることを申し出る。前半と同じように金に対して気前の良さを見せるタイモンであるが、ここでもタイモンの金に対する態度に何か意味を見出せるのではないだろうか。アルシバイアデーズとの会話を引用してみる。

Timon That by killing of villains thou wast born to conquer

my country.

Put up thy gold.

Go on; here's gold; go on.

Be as a planetary plague when Jove

Will o'er some high-vised city hang his poison

In the sick air. Let not thy sword skip one.

Pity not honoured age for his white beard;

He is an usurer. Strike me the counterfeit matron;

It is her habit only that is honest,

Herself's a bawd. Let not the virgin's cheek



Make soft thy trenchant sword; for those milk-paps  
That through the window-bars bore at men's eyes  
Are not within the leaf of pity writ;  
But set them down horrible traitors. [...] (14. 106-19)

自分に金の援助を断った友人たちとアテネに対して呪いの言葉を言い放つタイモンである。しかし、アルシバイアデーズがアテネを攻撃するのに必要なのは金であり、タイモンが手に入れた金はその手助けとなる事をタイモンは知っている。この金をやるとし、金への気前の良さを示すタイモンであるが、やはりここでもタイモンは、金の力を信じている。金があったころのタイモンは金によって友人から友愛を得られていると思っている。そして、金を失った後のタイモンは、金によって友人とアテネに対して復讐する事が出来ると考えており、金の重視の態度に変化は見られない。Bergeronが述べる作品の金から金の喪失、そして再び金という円環的構造は、変化しないタイモンにも当てはめられる。さらに Bergeron は“ While Timon completes the cycle by finding material gold again, he does not attain spiritual gold; this is his failure as an alchemist. His idealism is shattered—transformed—and it is not recovered ”(368)という説明を行っており、金を再発見した後もタイモンが精神的に満たされない様子を述べているが、タイモン自身が精神的に満たされない状態のみならず、外側から見たタイモンも、金がある時に友愛を金で得られるという考え、そして金を失った後には金で復讐できるという考え、両方ともに彼の金に対する精神的成熟は達成できていない。Bergeron の使う“ spiritual gold ”は、タイモン自身のみならず、客観的な見方をしても、金を持っている時も金を失った後も、タイモンが手に入れられない状態と言える。

タイモンは金を失った後に金を再発見しながらも、それを復讐の手立てにしようと考えている。金を持っている頃の惜しまず振る舞うという様子とは、世間と人を呪うという状態と正反対である。しかし、金の力を信じ、手放す事でその金の力が可能にするものを重視するという点で、同様に金に執着している。貧しくなったタイモンも、気前よく金を与えており矛盾しているようだが、金への執着を示しているという点で変化していない。

## 結論

第1節では、タイモンの友人への態度は裕福な時も貧しくなった時も、道具としての友人であり、不要ならいらぬという間違いをおかしており変化がない、という事を説明した。また第2節では金への態度を説明するにあたり、やはり裕福な時も貧しくなった時も、金の力を信じており金を惜しみなく与えはするが、実はその力を強く信じている金に執着するタイモンの姿を明らかにした。第1節、第2節で共に明らかにしたのは変化しないタイモンの姿である。

本稿の最初で、絵の贈り物をもらったタイモンは、生きている人間は不正直さによって姿を隠すが、絵の中の人間は見えているままのものであるから良い、と感謝を述べる。この絵の贈り物について作品のテーマを関連させるのが、本稿の目的であった。つまり、そのままの通りであるから良いとされる絵は、嘘が描かれたなら、そのまま本質を隠すものとなる、という悪い面も持っておりプラスとマイナスの両義性を持った変化しない贈り物である。変化しないタイモンと変化しない絵を関連づけて意味を見出すのが本稿の目的である。

変化が出来なかったタイモンはアテネを離れ、悲劇の人物として野をさまよう事になるが、タイモンがアテネを離れた後、挙兵したアルシバイアディーズによって、新たに不正が取り除かれたアテネが生まれる事になる<sup>5</sup>。タイモンの悲劇によりアテネは再生したと言えるのであり、結末は社会状況を考えるならば、完全な悲劇とは言えない両義性を持ったものである。Richard D. Fly は“ A recurrent idea in Shakespeare's tragedies—one difficult for modern readers to understand—is that an individual's real existence is manifested primarily through his social relatedness ”(250)と述べているが、社会との関連においてタイモンの破滅が、プラスの意味をもたらしている。絵のプラスとマイナスの両義性とも重なるタイモンの破滅ではないだろうか。

そしてタイモンの悲劇の直接的原因となった金も、悪い働きばかりでなく、良い意味も持っている。アルシバイアディーズの挙兵によりアテネが再生する手助けと金となるばかりでなく、以下の面では金が個人を良い方向に向かわせる。金を見つけたタイモンが山賊に金を与えようとする場面である。

Third thief He's almost charmed me from my profession

by persuading me to it.

First thief 'Tis in the malice of mankind that he thus  
advises us, not to have us thrive in our mystery.

Second thief I'll believe him as an enemy, and give over my  
trade.

First thief Let us first see peace in Athens. There is no time  
so miserable but a man may be true. (14. 450-7)

“ And gold confound you howsoe'er. Amen ”(14. 449)と金への憎しみをタイモンから聞いた山賊たちは、この家業をやめて人間が正直にならないようだったら世も末である、だからアテネで平和に暮らす、とタイモンの金と彼の言葉によって、忠告を与えられたかのように改心してしまう。金が良い働きをしている例である。タイモンに破滅をもたらした金も良い働きをする両義性を持つものである。

ここまでで分かっただろう。変化しない贈り物であり、両義性を持つ贈り物である絵は、変化できないタイモンと重なり、彼は破滅するが社会は良くなるという矛盾の両義性と重なる<sup>6</sup>。そしてこの両義性はタイモンの破滅の直接的原因の金が良い面を持つという両義性とも関連付けられる。これが本稿で出した絵の贈り物の意味という論題への答である。

マネーリテラシーと言って金にまつわる教育が、小学校の段階で既に行われているそうである。人を滅ぼすのも、成功に導くのも金が重要な要因になっているのは紛れもない事実である。金の知識すなわち悪、という考えを持っている人も多い事だろう。しかし、金は重要でありその教育が、未来を担う子供たちを成功へと導くのだ、と考えさせられる400年前に書かれた『アテネのタイモン』ではないだろうか。

## 註

1. 以下、『アテネのタイモン』からの引用は、William Shakespeare, *Timon of Athens*, Oxford UP, 2004年の版による。この版では幕の区別をしていないため、場と行のみ記す。
2. このタイモンの考えに正反対なのが自己犠牲的な愛「アガペー」である。また特に友情や友愛の意味を説明するのであれば隣人愛「フィリア」が古典ギリシア語で存在する。他に性愛「エロス」、家族愛「ストルゲー」等。
3. 音楽の描写で同じように必ず終わるものとして表現されているのは、『十二夜』の冒頭の音楽と食欲、そして恋が同一線上に語られている場面である。“ If music be the food of love, play on, / Give me excess of it, that, surfeiting, / The appetite may sicken, and so die ”の描写で、終わる音楽と恋の終焉の暗示を読み取れるのと同じように、タイモンの栄華の終焉を読み取る事が出来る。
4. 聖書において旧約聖書の世界創造が7日で行われたのはよく知られているが、特にこの場面の贈り物とお返しという契約とも考えられる関係に近い、7の数字に関連したものは、「ヨシュア記」第6章1節から16節で語られる、ヨシュアがエリコの町の城壁を倒す事に成功したのは、7日目に7人の司祭が契約の箱を担ぎ、7つの角笛を吹きながら、町を7周してからの事である、という記述である。
5. アテネの平和の証拠には作品の最後のアルシバイアデーズの言葉、“ Make war breed peace, make peace stint war, make each / Prescribe to other as each other’s leech ”(17. 84-5)が挙げられるだろう。
6. 社会改革を考えずにあくまでタイモン自身の結果に注目しているのは、Richard Finkelstein であり、彼は“ By foregrounding several perspectives on friendship and benefits, and focusing on a hero who is both weak and dominant, *Timon of Athens* reaches rueful conclusions about the interplay between enlightened self-interest and coercive force ”(813)としている。

引用・参考文献

- Bailey, Amanda. “ "Timon of Athens", Forms of Payback, and the Genre of Debt. ” *English Literary Renaissance* , SPRING 2011, Vol. 41, No. 2 (SPRING 2011), <https://www.jstor.org/stable/43447966>, pp.375-400.
- Baldo, Jonathan. “ The Shadow of Levelling in "Timon of Athens". ” *Criticism* , fall, 1993, Vol. 35, No. 4 (fall, 1993), <http://www.jstor.com/stable/23116563>, pp. 559-88.
- Bergeron, David M. . “ ALCHEMY AND "TIMON OF ATHENS". ” : *CLA Journal* , June, 1970, Vol. 13, No. 4 (June, 1970), pp. 364-73.
- Blits, Jan H. . “ Philosophy (and Athens) in Decay: "Timon of Athens". ” *The Review of Politics* , FALL 2016, Vol. 78, No. 4, SPECIAL ISSUE ON SHAKESPEARE'S POLITICS IN HONOR OF THE 400TH ANNIVERSARY OF HIS BIRTH (FALL 2016), <https://www.jstor.org/stable/24890016>, pp. 539-50.
- Davidson, Clifford. “ "Timon of Athens": The Iconography of False Friendship. ” *Huntington Library Quarterly* , Summer, 1980, Vol. 43, No. 3 (Summer, 1980), <http://www.jstor.com/stable/3817462>, pp. 181-200.
- Finkelstein, Richard. “ Amicitia and Beneficia in *Timon of Athens*. ” *Studies in Philology* , Fall, 2020, Vol. 117, No. 4 (Fall, 2020), <https://www.jstor.org/stable/10.2307/26973843>, pp. 801-25.
- Fly, Richard D. . “ The Ending of "Timon of Athens": A Reconsideration. ” *Criticism* , Summer 1973, Vol. 15, No. 3 (Summer 1973), <https://www.jstor.org/stable/23099656>, pp. 242-52.
- Maitra, Ellorashree. “ Toward an Ethical Polity: Service and the Tragic Community in *Timon of Athens*. ” *Renaissance Drama* , Vol. 41, No. 1/2 (Fall 2013), <https://www.jstor.org/stable/10.1086/673909>, pp. 173-98.
- Pierce, Robert B. . “ Tragedy and "Timon of Athens". ” *Comparative Drama* , Spring/Summer 2002, Vol. 36, No. 1/2 (Spring/Summer 2002), <https://www.jstor.org/stable/41154110>, pp. 75-90.
- Prendergast, Maria T. M. . “ "Unmanly Melancholy": Lack, Fetishism, and Abuse in "Timon of Athens". ” : *Criticism* , Spring 2000, Vol. 42, No. 2 (Spring 2000),

<https://www.jstor.org/stable/23124304>, pp. 207-27.

Shakespeare, William. *Timon of Athens*, Oxford UP, 2008.

— — —. *Twelfth Night*. Penguin Books, 2005.

Walker, Lewis. “Fortune and Friendship in *Timon of Athens*.” *Texas Studies in Literature and Language*, WINTER 1977, Vol. 18, No. 4, An Issue Devoted to the Renaissance and Enlightenment in England (WINTER 1977), <https://www.jstor.org/stable/40754463>, pp. 577-600.

「ヨシュア記」、『聖書』、日本聖書協会、1994年。